

どうしよう新田

戦国時代末期、この地は北越の勇将上杉謙信の領地となる。謙信も他の戦国武将と同じく積極的な新田開発を行った。郷内には謙信・景勝の時代の開村と伝えられる村々が多い。

豊田の世になつて蒲原郡六万石を与えられ、新発田城主となつたのが溝口秀勝。以来、亀田郷は幕末まで、大半が溝口氏の支配するところとなつた^{*1}。

当時の様子は新発田藩の歴代藩主を祀る豊田神社の文書でも窺える。「信濃、阿賀の大川氾濫横溢し、東に加治放生、佐々木の諸水あり、西に中之口、刈矢田、五十嵐の諸流あり、一帯ことごとく湖水たり。四周の地を山通りといひ島通りといひ、僅かに村落を占在するのみ^{*2}」。

また別な文書にはこうある。

「土地卑湿、連年水害の要あり、民ほとんど生を樂しまずして、六万石となすも、いわゆる荒田荒畠その半ばをすぎ、実歳入二万石に満たざる^{*3}」。

慶長五年（一六〇〇）の新発田藩の封録目録には横越島（亀田郷）は三、七四一石であるが、同十七年の納高は三六七石。實に封録の一割しか收入

がなかつたことになる。「民ほとんど生を樂しまずして」という描写には、風景としてある種の凌みが感じられよう。藩は率先して新田開発に力を入れたが、半ば脅しまじりで高压的に開墾させることも少なくなかつたという。藩から無理やり拓かされた田を「こうし

牡丹餅と二反の田

近世初期の開発状況

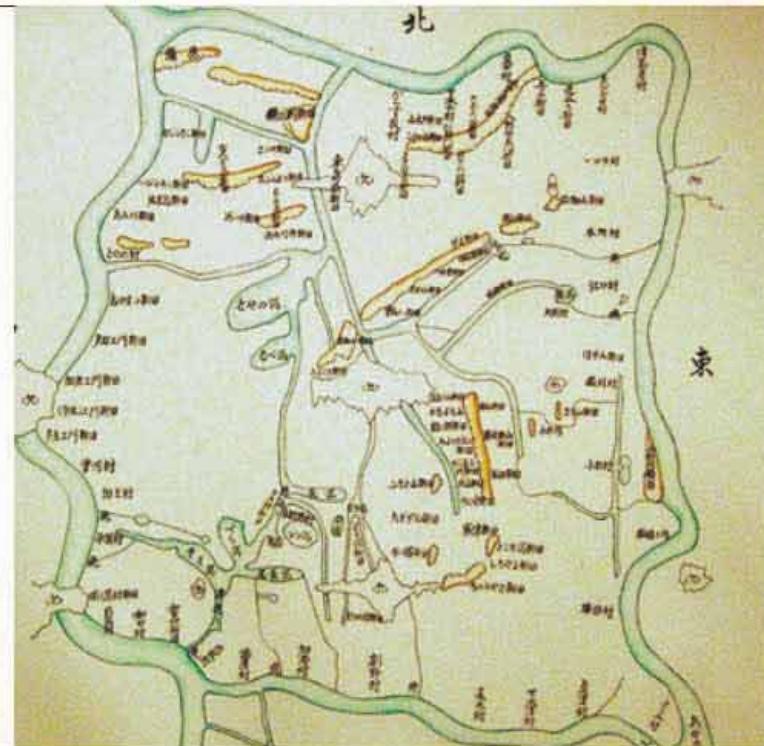


図1 寛永16年(1639)の横越島絵図

よ「牡丹餅」には、當時「どうしよう新田」を交換したといつた出来事が記されている。牡丹餅一個程度の価値、それほどに劣悪な田であつた。

詮方なし」に開墾したとの意らしい。「龜田郷治水史」には、當時、「牡丹餅」と「反分の「どうしよう新田」を交換したといつた出来事が記されている。

牡丹餅と二反の田

ともあれ、藩祖の入封から約八十年を経た段階で、新田開発は領内に百七十四の新田村を括くことができた。このうち亀田郷は四十八村。

地元の方々への参考資料として、この時期に開発された村と年を表1にあげておく。

亀田町の発展

ここではその当時開発された村のひとつ亀田郷の中核地となつた旧亀田町（現新潟市）の発展を見てみたい。

地元の伝承によると、村の開祖は村木七右衛門という戦国浪人。関ヶ原の戦いの後、幕府の残党狩りを逃れてこの地にたどり着き、砂丘上の未開地に目をつけて鍬を入れたらしい。寛永年間に貝塚新田を、慶安四年（一六五一）には磯の中谷内新田を開発し、これが亀田町の発祥となつたという。

中谷内新田は栗ノ木川の起点にあつた。

栗ノ木川——何百年にわたつてこの亀田郷を支えてきた母なる川。昭和初期まで川幅は四五〇七二メートルであつた。全体が大きな皿状になつているこの地では、あらゆる水が鳥屋野潟へ集

まつてくる。栗ノ木川は十本の支流を持ち、郷内の大半の排水を鳥屋野潟に導くとともに、鳥屋野潟の水を新潟の港まで運ぶ大排水路であった。と同時に、この地の主な移動手段であった舟運の大動脈、いわば亀田郷と新潟を結ぶ運河のメインストリートでもあつた。

そして、この栗ノ木川河口の沼垂町には新発田藩が蔵所を設けて周辺の年貢米などの集積場としていた。必然的に中谷内新田は交易の場として成長してゆく。元禄六年（一六九三）、月に六回の定期市（現在まで続く亀田町の六市始まり）を開くことが許可される。これを期に中谷内新田は亀田町と名を変え、この地の商業機能をほぼ独占する形で發展してゆくのである。

新田開発と治水

図1は寛永十六年（一六三九）当時の亀田郷を描いた絵図である。

新田や村があるところは、砂丘の周りと川の傍にできた自然堤防の微高地に限られている。おそらく、村名のない場所は草だらけの湿地、潟湖とも沿いとも判別のつかない場所であつたので

あろう。注目すべきは、絵図左下、和

田村新田と花牧村の間で信濃川が分流

してこの地に流入し、そえ潟、べら潟、

長潟といった多くの潟湖をつなぎながら

鳥屋野潟へ流れ込んでいることであ

る。しかもこゝは、信濃川が阿賀野川

の分流（現在の小阿賀野川）とぶつか

り、最も流れの勢いが増すところである。

大雨の時などは、いつたいどういう状

況になつたのであろうか。

和田村・花牧村間の締切り堤防はその後、造られたらしい（水害で記録は消失）。和田村は近世になつて百年たらずで、石高にして六倍、年貢高では十一倍という驚異的な増加を見せてゐる。しかし、こゝは江戸時代、四回の破堤を繰り返している。

他の地域の新田開発であれば、水を引いてくれば水田はできた。しかし、この地における新田開発は何よりも水を排除することであり、加えて洪水との格闘であったのである。

*1 早通、西川 横越、……おお牧瀬藩は、新發田藩領替りつく。

*2 「牡丹餅記」原文不明、「水と土と農民」より

表1 近世初期の亀田開発表

開発年	村名	地域名
慶長10(1611)	猪ヶ馬場 新田	石 山
17	城 山 新田	鳥 田
寛永1(1624)	社丹山 新田	石 山
同	前 山 新田	
4	後 口 新田	鳥 屋 野
6	施 ケ 山 新田	石 山
同	鍋 新田	
同	久 蔵 興 野	普 野 木
8	上 所 島 新田	鳥 屋 野
同	紫 竹 新田	石 山
10	山 之 下 新田	沼 重
同	大 谷 内 新田	
同	若 青 谷 新田	大 江 山
同	葉 山 新田(葉山々)	葉山々石山
11	金 莖 山 新田	大 江 山
同	丸 山 新田	大 江 山
12	中 野 山 新田	石 山
13	葉 竹 山 新田	鳥 屋 野
同	中 村 新田	兩 川
14	神 湯 吉 新田	鳥 屋 野
同	中 沢 新田	
同	兜 池 新田	石 山
同	西 普 川 新田	普 野 木
同	砂 岩 新田	亀 田
同	西 山 新田	大 江 山
同	馬 蓋 新田	石 山
同	下 新 田	石 山
同	石 仏 新田	大 幌
同	高 山 新田	亀 田
15	下新田(巻川村地内)	
同	萩 蒼 棚 新田	亀 田
同	下 塚 新田	石 山
16	丸 潤 新田	普 野 木
17	米 山 新田	鳥 屋 野
同	石 山 新田	石 山
同	長 潤 新田	石 山
18	大 谷 内 新田	
正保1(1644)	近 江 新田	鳥 屋 野
同	小 針 之 木 新田	鳥 屋 野
3	浦 新田	横 越
慶安1(1648)	新 浦 興 野	普 野 木
2	加 木 新田	普 野 木
3	天 野 新田	普 野 木
4	亀 田 町 新田	亀 田
万治2(1689)	江 頃 新田	大 江 山
寛文3(1693)	椎 山 新田	大 江 山
4	河 渡 新田	大 形
5	龜 谷 新田	

伊藤充「新田開拓と新発田藩」(『國土新編』第2号より)